

## 第1回勉強会報告と

### 第2回のお知らせ

#### ・第1回勉強会

テーマ 『女性とスポーツ』  
日時 4月17日 午後3時～5時  
会場 日本スポーツマンクラブ

今回は、講師の3人の方々が、それぞれ海外生活の経験が豊富なので、欧米の女性スポーツ事情について主に語っていただきました。以下は、その要約です。

清和洋子さん（中大、東海大講師。女性史、女子体育史を研究中。1966年～72年ポーランドに滞在）ポーランドは第二次世界大戦後に社会主義の国となり、女性は法律的にも男性と同等の権利を保障されている。全土に保育施設も完備し、家事に対する男性の協力の姿勢も、日本より自然に受け入れられ、女性が働くことに関しては、障害はない。ただ、実際には職場での管理職に女性が少なく、完全な平等社会は、まだ実現していない。

このような社会背景の中で、スポーツは民主主義教育の一環として、学校および職場で取り入れられている。スポーツ政策は、日本と同様、チャンピオンスポーツと大衆スポーツの2本立て。大衆スポーツの最近の傾向として、職場中心から家族を軸にした地域スポーツへの移行が見られる。このような状況の中で、女性はスポーツを無理のない形でふだんの生活の一部としてとらえている。

萩原美代子さん（文化女子大学講師。女子運動服の歴史が専門。1980年～81年英国の初的女子体育指導者養成学校の研究のため1年間滞英）女性スポーツの流れを見たと、欧米では女性解放運動と連動した動きとしてとらえることができる。つまり、女性がスポーツをする場合には、あらゆる

意味での葛藤があるということだ。

男性社会そのものであったスポーツは、強さやスピードを誇示することが目的であるのに対し、伝統的な「女らしさ」は、真っ向からぶつかる。女性が歯を食いしばる様子は醜い、或いは「生む性」としての特性がスポーツによって損なわれるといった考えが、長い間、支配的だった。

たとえば、英国の場合は、女子教育に体操を組み入れることに、中流から上流の親たちは、女性のたしなみ程度で留めるべきだという意見だった。このようなスポーツに対する捉え方は、日本でも同様で、明治初期には「首を振ったりすると髪が乱れる」というレベルで考えられていた。日本で女子の高等教育に初めて体育を導入したのは、日本女子大学校（現在の日本女子大）である。女子教育の中に、体育が取り入れられて、わずか100年という浅い歴史しかないのが、日本なのである。

小田多江子さん（日本体育大学大学院在籍。1961年～64年米国フロリダ州立大学に留学。その後も豪州やバブアニューギニアなどで海外生活を数回経験している。米国ではスポーツ・体育教授法などを専攻）WSF Japan の会報を読むと、女性としてのハンディキャップのことが大きなテーマとして取り上げられているけれど、それ以前に、まず女性として、人間として何ができるかといった前向きな姿勢で、私はスポーツを考えたい。米国や豪州と比べ、日本の女性はスポーツに対する考え方が全く違う。

私は学生（慶大）時代、テニスをしていたので今でもテニスのコーチをすることがあるが、日本の女性は、なぜ自分がテニスをするかという目的をしっかりとっていない人が多い。たとえば○○さんと△△さんがプレーしている、といった些細なことを気にしたりする。その点、欧米の女性はプレーのためにコートに出かけていくのだから、時間を決めて存分にプレーし、さっさと引き揚げていく。要するに、日本の女性は個人として精神的に独立していないのだと思う。

#### ◆ 第2回勉強会のお知らせ ◆

第1回のテーマは、『研究者向け』という感じでした。会員の方々の職種や興味の対象、そしてWSF Japan に期待するものが異なっているため、毎回、それぞれの方に満足いただけるものをつづり取りあげていきたいと思えます。

ここ数年、日本の女性スポーツの流れの中で注目される動きの一つに、競技別の女性のための組織作りがあげられます。以前も、選手と呼ばれるようなトップクラスの人たち、あるいはそれを目指す学生のための組織は単独で、または男性組織の中に組み込まれて存在していました。たとえば日本女子プロゴルフ協会があり、アマチュアの各

競技団体は、女子選手を抱えるといった具合でした。

ところが、新しい波として、今度は市民スポーツを底流とした、いわゆるママさん選手を統轄する組織があらこちで誕生してきたのです。今回は「女性スポーツ団体の歩みと今後の方向」と題し、日本女子庭球連盟、日本家庭婦人卓球連盟、日本女子サッカー協会、全日本家庭婦人バレーボール連盟などの代表者に、組織のスタートから現在の活動状況、今後の方向などについてお話いただきます。日程等については6ページをご覧ください。